

## 事業名 <sup>きよせ</sup> 清瀬せせらぎ公園整備事業

河川改修によって生まれた旧川を都と市と住民とが協働して整備することで、地域住民の川への思いを育み、ふるさと意識の向上に結びつけた事業

受賞機関 東京都北多摩北部建設事務所  
清瀬市建設部

事業実施期間 平成10年5月6日～平成12年8月17日

事業費 370百万円

### 事業等の特徴

当公園の整備により、沿岸住民の川に対して持っていた「恐怖感」が「愛着」へと変わり、地域住民の川への思いを育んだ点で、評価が高い事業である。

市民ボランティアが、公園の清掃等の活動を活発に行っており、また、自然保護の活動家等が、地域の市民に対し、植生等の勉強会を開催するなど、積極的な公園の利用が行われている。

### 事業の概要と利用者等の評価

空堀川は、武蔵村山市に源を発し、東流して柳瀬川に合流する荒川水系の一級河川である。事業箇所の地域は、都心から25km圏内に位置し、市街化が進みながらも雑木林などの緑が多く残っている。しかし、沿川住民は、水害常襲に長い間苦しめられ、近年では水質汚染にも悩まされている。

清瀬市では、昭和63年に交付された「ふるさと創生」の資金を有効に活用する目的で市民から広くアイデアを募集した。最優秀作品に選ばれた「自然学習園づくり」は、空堀川の河川改修に伴い旧川として残ることになった延長約500m(幅員約10m)にせせらぎを蘇らせようという市民からの提案であり、これが今回の整備の原形となった。この案を実現するため、清瀬市が市民参加による「自然学習園整備素案を考える市民懇談会」を発足させ住民意見の集約や、せせらぎの水際の植生・植栽や学習のための施設等の検討を行い、東京都が河床の形状や、せせらぎの創出のための堰の設置等の検討を行った。平成10年度から工事が開始され、「武蔵野の雑木林」の中を幅約1mのせせらぎが流れ、植生豊かな水辺空間



校庭と散策路をつなぐ木道

が創出された。上流には「せせらぎゾーン」が、中流には自然学習ができる田んぼ・畑・池等を配した「親水散策ゾーン」が、下流には緑地保全地域の貴重種カタクリ・ニリンソウ等が観察できる「生態保全ゾーン」が整備された。

### (1) プロセスに対する評価

- ・ふるさと創生の資金を有効活用するため、市民にアイデアを募集し、事業の足掛かりとした。
- ・市民参加による「自然学習園整備素案を考える市民懇談会」を発足させ、先進事例箇所への視察等を行って整備の基本的な計画案を作成した。これによって周辺自治会に環境対策委員会が自主的に設置した。

### (2) 事業完了後及び開園後の評価

- ・せせらぎ公園は田んぼや「武蔵野の雑木林」の間を散策でき、平日にも多くの人が訪れている。
- ・せせらぎの水は、少量で効果を上げられる循環利用を行っている。
- ・閉鎖管理していた隣接のカタクリ棲息地を開放し、「カタクリを地域のシンボルとして清瀬に残そう」との市民の声が高まり、「清瀬カタクリ祭」を開催した。
- ・地域環境の向上により、自主的な市民ボランティアの清掃などの活動が活発になってきている。
- ・せせらぎ公園の学習管理棟では、地域の小中学生や先生、一般市民等に対し自然保護の活動家等が、清瀬市の植生等について勉強会を開催するなど、地域の環境保護活動が盛んになってきている。

### 審査委員会委員の意見等

- ・「ふるさと創生」の資金の有効活用と市民の恐怖感から愛着への意識変容が認められる。
- ・市民からの発意・提案による事業の具体化がみられる。
- ・公共整備を真の意味での公の資源とするためには日常的な共働作業が、細やかに参加しやすいプログラムとして必要であり、多様性が求められる。そうした意味で今後を期待したい。
- ・「ふるさと創生」などを使って各セクターが息長く取り組んだ点を評価。開放型の公園は利用状況で判断されるべきである。



生態保存ゾーン